



YMCA

月刊 The YMCA 付録

編集・発行 / 日本 YMCA 同盟 東京都新宿区本塩町7番地
大阪青年 発行: 末岡祥弘 編集: 大阪 YMCA 広報室
〒550-0001 大阪市西区土佐堀1-5-6
TEL06-6441-0894 FAX06-6445-0297
URL: http://www.osakaymca.or.jp/
(年10回発行) 1947年10月27日 第3種郵便物認可

大阪青年

2007 Sep.9

No. 598

2007年度年間聖句

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。
どんなことにも感謝しなさい」

(テサロニケの信徒の手紙1 5章16~18節)

大阪YMCAの使命

大阪YMCAは、聖書に示されたイエス・キリストの愛と奉仕の生き方に学び、YMCAの世界的な運動に連なり、希望を持って、共に生きる社会の実現をめざします。

- ボランティア精神を高く、互いに協力し、明るくあたたかい地域社会の形成に努めます。
- すべての世代の若者が、出会いと生きがいを見いだすための、生涯にわたる気づきと学びの活動を展開します。
- 未来を築く力強い子どもたちを、家庭、地域社会と共に育てます。
- 生命を尊重する心を養い、自然と人間が調和する働きをすすめます。
- 世界の人びとと力を合わせ、環境、人権、貧困の課題に取り組み平和で公正な世界をめざします。

ネットワーク型福祉社会を目指す大阪YMCA

◇◇変革機関 (チェンジ エージェント) へのチャレンジ◇◇

大阪YMCAはVISION2010で「ネットワーク型福祉社会=希望を持って共に生きる社会」の形成を提唱しています。福祉社会が盛んに議論された時代、新しいYMCAの機能として次のような期待がありました。

- 1) 諸種のニーズを感じる市民に対する援助機関
- 2) 市民に対する自己充足・自己充実の情報伝達機関
- 3) いろいろな青少年団体や機関と協働しながら福祉社会を作り上げていく調整機関、調整しながら他の機関につないでいく仲介機関
- 4) 社会的欲求を見つけ出し社会に対して提起していく問題提起機関、代弁していく主唱者(アドボケイト)としての役割つまり、新しい社会に向かって動き、変化を起こしていく「変革機関(チェンジ エージェント)」としての働きが求められていたのです。(「福祉社会の形成とYMCA」)

これらは正にYMCAの公益性への期待ですが、はたして何処までの力量が私たちにあり、応えて来たのか、これから目指す社会と私たちの働きのありよう等が1990年代後半VISION2010を作る過程で議論され、上記の期待にチャレンジしてきました。

一例をあげれば

- 1) 市民ニーズへの援助機関としては、「乳児の保育園から高齢者の特別養護老人ホーム」までの生涯にわたるプログラムへ対象を複合拡張してきたチャレンジ
- 2) 情報伝達機関としての「NPO推進センター」「地域包括支援センター」等の創設
- 3) 調整・仲介機関として地域諸資源(諸団体、NPO、行政、学校等)との具体的なプログラムを通じた共催、後援、調整役を担いネットワークを形づくってきたこと
- 4) 問題提起機関としては事業プログラムや社会奉仕活動を通し



2005年聴覚障がい青少年国際キャンプ

て会員ボランティアの活動が地域の課題に積極的にチャレンジするものに改革されてきたこと

などが上げられますがまだまだその働きとチャレンジは不十分です。

2000年代の社会は、大きな変化の中にあります。グローバルな関係がますます強まる経済優先社会の中で、今こそ私たちはこれらチャレンジする力量を強め「アソシエーション」として市民が様々なネットワークの中で、お互いにアソシエートする(孤立・孤独に抗して、様々な人々が連帯し、支えあう)関係と仕組みを形造る必要があります。創立126年目の今、ネットワーク型福祉社会への真の「変革機関(チェンジ エージェント)」と言えるよう皆様とともに励みたく思います。

大阪YMCA 総主事

すえおか よしひろ
末岡 祥弘

地の塩

▼公益を念頭に置くべき時代を迎えている。公益を考える時、その基盤となる考え方は、協働、共生というところだろう。協働と言う時、人間同士が同じ目的のために、共に働くことを意味すると思うが、共生と言う時、人間同士が共に生きることを意味するのみならず、人間が地球社会にあって、他の動植物も含めての共生を考えねばならない。他の動植物も共に命を持つものであり、命持つものの中で、最も優位に立つ人間は、最も優位に立つからこそ、他の動植物の命にも心を留めねばならない。優位に立つ人間は、他の動植物を利用して生きていくが、見方を変えれば他の動植物の命を支えられて生きていく。他の動植物を食する場面もあるし、鑑賞用、愛玩用とする場面もある。その場合も、私たちの魂が癒され、本来の姿に蘇らされる場合も多い。▼機会あつて、イギリスの湖水地方を旅した。生まれ育った湖水地方の野の草や花、小動物に慣れ親しんだ、ヒアトリクス・ポターが、今、世界の人々に愛されているピーターラビットの作品を生み出した。この近くで泊まったホテルの窓から中庭を見ると、褐色のウサギが2、3匹、中庭の草を食んでいた。リスも見た。小鳥も身近にいて、美しい声でさえずっていた。▼日本も以前に比べると、自然が私たちの身近に戻りつつあるが、私たちの在り方次第で、自然が私たちに近づきもし、遠ざかりもする。自然の中で生かされている私たちは、自然と共に生きる生活を考えたい。その延長上で互いの人間関係を大切にしつつ、隣人と共に生きる生活を志したい。